

贗人形●佐江衆一

贗人形●佐江衆一

筑摩書房

佐江衆一（さえ・しゅういち）

1934年 東京生れ。

主著——「太陽よ、怒りを照らせ」「闇の向うへ跳ぶ
者は」(新潮社)「鼠どもへの訴状」(文芸春
秋)「遙か戦火を離れて」(角川書店)

© 1977 Shūichi Sae, Printed in Japan.

贗人形

著者 佐江衆一

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

印刷 暁印刷

製本 矢嶋製本

一九七七年九月十日 初版第一刷発行

〇〇九三一八〇一五九一四六〇四

目次

贗人形
…………… 5

人と鳥との間
…………… 73

夢の墓穴
…………… 153

贗人形

賸人形

いまなお肥満しつづける女は、夥しい脂肪を巨大な肉の袋のように躰じゅうにぶらさげた、ほとんど素裸の姿で、俯伏せに横たわっていた。肥大して雌牛の乳ほどにもたれさがった両の乳房とぶわぶわした厚ぼったい腹部の、クッションのきいた自分の肉体のベッドに、腹ばいに寝ているようであった。

彼女は、立ちあがることや歩行はもちろん、仰向くことも寝返りをうつこともできない。首をめぐらすことと両腕をうごかすことはできたが、その動作はぎくしゃくしていて緩慢だった。ほとんどじっとしている彼女は、眠っているのか眼ざめているのか、あるいは生きているのか死んでいるのかさえわからなかった。その彼女を、コビトカバかゾウアザラシに似ている、という見物人もいた。好奇心旺盛な彼らは、テレビのびっくりショーなどではとてもお眼にかかれない、グロテスクな存在になりおおせた彼女を見に集ってくるが、やがて辟易して、その姿

を見世物にしている彼女へ非難の声をブーブーならすか、おざなりに同情のカンパをして、すこすこと引きさがって行くのだった。

しかし、ある過疎の町で、大きなお人形さんみたい、と感嘆の声を発した頬の赤い幼い女の子の観賞眼の方が、はるかに的を射ていたのである。

いまなお肥りつづける女は、確かに体重三百キロにも近い日本一のデブ女であったとはいえ、その想像を絶する巨大な肉体は蠟人形のようにすべすべしていたし、心臓のあたりに雪洞^{ほんぼち}でも灯っているときえ思えるほどに、半透明の肉が内側から薄桃色に輝いていた。しかも、牀に比して小さい、そこだけしかつての彼女の面影をとどめる整った顔には、どぎついほどの薔薇色の口紅がひかれていたばかりか、柔かく波うつ豊かな髪も反りかえった長い睫^{まつげ}も、手入れがゆきとどいて、美しいまき毛の前髪をしたからものうくそがれる栗色の瞳の奥には、いま眼ざめたばかりの美少女が人形の物語の夢でも見つづけているような、うっとりとしたあどけないひかりが宿っていた。マダム・タッソーの蠟人形よりもはるかに人形らしく、そして自立して、彼女は人びとを勝ち誇ったように眺め、その自分をこころやさしく見つめていたのである。

彼女は家族や社会とのいっさいのかかわりと、愛や希望を自ら殺^そぎ落して、ひたすら食べることに、眠ること、排泄することの快感に専念した結果、あらゆる虚飾から解放されたかわりに、肥りに肥って、頭蓋の形と顔だち以外ほとんど人間の原型を喪^な失^はっていたが、しかし、

かつて社会性の強い芝居を演じることで多少は世間に知られた女優であった彼女は——そんなことは彼女自身すっかり忘れているのだが——いまの醜く肥満した自分の肉体を人まえにさらす歓びに生きていた。そして、誰にも語りつたえることのできない物語を、独りでつむぎつけているのだった。その物語の冒頭は、およそ次のようである。

「老婆は、きょうもひとりで、赤黒い照りを放つねっとりとした泥を、その皺深い手でこねていました。ときおり自らの乏しい血をしぼりだして、一滴、二滴、したたかせます。まるで囚われた者のように、ひかりの射しこまぬ薄暗い湿った土間で、地べたにうずくまって、自らの老いた女の血をまぶした泥を、終日こねつづけていました。」

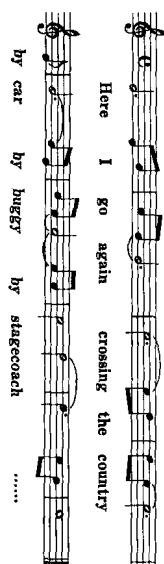
しかし、老婆が囚われの身でもなく、何者からも強制されているわけでもないことは、身をいれたその手つきと、飲みのひかりにあふれた、その憑れた眼の異常な輝きで察せられます。おそらく、彼女はもはや残り少ない生命ある日々の中に、その創造の仕事を完成しなければならぬのでしょう。

うずくまる老婆のかたわらに、小さな火が赤あかと燃えていました。藁ぶき屋根の家の外には、樹木の梢をならす風の唸りがしじゅう渦まいていましたが、いまが昼なのか夜なのか、そして時が果して刻まれているのかさえ、老婆は少しも氣にとめていない様子でした。……

肥満した女も、時間をうしなっていた。町から町、村から村へとサーカスのように移動する生活を始めてからもう半年にもなるよ、とかつての夫だと自己主張する小男にいわれても、一体どれほどの時が過ぎたのか彼女にはわからなかったし、知ろうとも思わなかった。そして、その男が果しかつての夫なのか、うごけぬ彼女のしもの世話までする付人なのか（飼育係といった方が正しいかも知れないが）、あるいは、彼女を見世物にして稼いでいるヒモのような男なのか、彼女にはどうでもよかった。しかし、男はふしぎそうにたずねることがあった。「ところでお前さんは、こんなことで幸福なのかい？」

ええ、もちろんじゃあないの、なぜ、そんなわかりきったことを幾度も聞くのよ、と彼女は微笑して答えてやる。しかしその言葉は、脂肪におしひしがれた気管からもれる有気音のみで、不機嫌な獣の唸り声のようであったから、小男はおびえて、「ちょ、ちょっと待ってくれよ。いまの生活はお前さん自身が望んだことだし、いまのお前さんにはこのおれが必要なのじゃないか。おれがいなかったら、どうなるというのだい」と言い訳めいてしゃべった。だからどうだというのよ！と反問する彼女の言葉は、ブルルッ・ブルルッという振動音のみである。聞きよによつては赤ん坊をあやすようなその巻舌音をよろこぶのは、かつての息子らしい可憐な少年だった。少年は巨大な彼女の肌へ頬をすりよせ、充ちたりて眼をとじる。そんなとき

彼女は、わずかばかりでも母性を回復するというのではなく、彼女の過去のなかで唯一の記憶としておぼろげに残る英文の詩の一行——かつて舞台のあいまに愛読したフアーレンゲッティの『サンフランシスコからの旅立ち』という詩の一部であったが——に自己流のメロディをつけて歌ってやるのだった。



もっとも、この詩と折角のメロディもまた、彼女の内臓のスピーカーから豊満すぎる肉体の隅ずみへのみひびくだけだ。しかし少年には、肥った女のあたたかい肌をふるわせて伝わってくる音波が、子守歌の、甘い、哀しい、穏やかな波長と感じとれるらしく、いっそうびったりと魅をすりよせてきて、安らかな眠りへ落ちるのだった。すると、小男がたいそう嫉妬して、少年を邪険に小突きまわして眠らせないことがあった。四十男と十歳になるかならないかの少年の諍いは、いつ果てるともなくつづくのだが、二人がおたがいを「父」あるいは「息子」と認めているのかどうか、きわめて疑わしかったのである。

おたがいわからないもの同士のこの「三人家族」は、きょうも次の町へと移ってゆく。桜の満開の田舎道を、箱型の車体をゆらして走って行くその緑色のキャンピング・カーの横腹には、白いペンキで大きく、次のように書かれていた。

《それでも、私はまだ生きている！》

Ⅱ

いまなお肥満しつづける女は、夢を見ることもない脳の襲へ爽やかにひびいてきた、トランベットの音で眼ざめた。重い臉をわずかにひきあげると、肥大した臉の肉にさえぎられた横長の三か月型の視界に、空地のぬかるみと水溜りがひかっていた。見知らぬ田舎町の、午さがりであるらしかった。

身うごきできぬ彼女の後頭部をやさしく叩くような音もひびくのは、キャンピング・カーの屋根にいる少年が、一行の到着を町じゅうに知らせるために風見の鶏のようにくるくるまわりながら軽くスキップをして、トランベットのけんめいに吹いているからだ。少年はチンドン屋かサーカスの道化役を気取って、鼻の頭と両の頬っぺたに丸く赤チンキをぬり、手製の紙の三角帽子をかぶっていた。ぼくがいなかったらこの一座もおしまいだと思ふなあ、稼ぎが半減す

るよ、ときかしげな自信のほどをほめかすのが、少年をひきとって一座にくわえた中年男への捨て台詞であったが、四十男のほうは男のほうで、離婚したときに預けた社会福祉の施設から連れだしてやったのはせめてもの親心であったのに、この恩知らずのガキが！と黄色い糸切歯をむいて怒鳴りかえすのであった。

そのような男ふたりのやりとりで紹介する関心もどちらの側へ加担する愛情もとうのむかしに捨ててしまっている女は、少年がひとりでいかにも人気者の道化を気取って吹きならすトランプペットの、いつどこで覚えたのか昭和初年頃のまだ華やかなりし浅草を象徴するような哀愁をおびたメロディと、少年の裸の足裏が車の屋根を軽く叩く音を聴きながら、けだるく首をもたげて、キャンピング・カーを改造してとりつけたショーウィンドに似た大きな厚い窓ガラス越しに、カーテンの隙間から、町の光景を眺めた。

水溜りのひかるぬかるむ空地は、最近建物をこわした跡か突然の大火に見舞われた焼け跡でもあるらしく、黒こげの材木や瓦礫の山が築かれ、コの字型の土台石や踏みあらされて碎けたタイルの便所の跡なども露出して、その隅に、花ざかりの桜の老木が薄曇りの淡い午後の陽をあびて、あるかなきかの春風にはろはると花びらを散らしていた。その花と風と陽のかげろいは、ここしばらく、うごけぬ女の網膜に映りこんだ馴染の風景であった。

ほかならぬ自分自身の、夥しい脂肪のぬいぐるみから首と手足をつきだしているような彼女

を、ためつすがめつ診察した医師や学者の計算によれば、彼女をもとのすんなりとした女優の
軀にもどすには、九年間にわたってコーラばかりを飲みつづけるという極度の節食か、その重
い巨体をえっちらおっちら引きずって地球を二周やすみなく歩きつづけねばならなかったが、
そのようなことはもちろん不可能であったから、彼らの一致した實際的意見は、冬の寒さも夏
の暑さも命とりになるという極めて消極的な見解であった。もっとも、少しも瘠せたいとは願
わず、なお肥大して裸で生きのびたいと思っている彼女は、花の香にまみれてとろとろとまど
ろみつづ稼ぐ日々を選んだ。そこで蜜蜂業者が花ざかりの野を追って移動するように、冬のあ
いだ九州の南端の半島を旅して過した彼女の一行は、ヤマトザクラ・ソメイヨシノなどの桜の
開花前線によりそうようにして、東北の町へと日本列島を北上してきたのだった。

かくも肥満して脂肪の塊となった彼女のことは、当然のことにおおきな話題になった。しか
しこれこれ二か月も過ぎてからは、物好きな週刊誌やテレビ局でさえ二度と紹介する興味はう
しなべて、最近では人びとが彼女の消息をとくに話題にする暇はなかったのだ。たとえば、あ
る港町でショーを打ったとき、たまたま春の選抜高校野球にその港町の高校チームが出場して
いたとはいえ、彼女を見に来る客は一人としていなかった。アタマにきた小男もまた漁港の安
食堂へ高校野球の実況テレビを見にでかけてしまい、腐敗した魚のはらわたの匂う空地にぼつ
んと停車していたキャンピング・カーでは、肥った女とトランペット吹き少年がわびしげに